



失語症における文発話と理解、訓練に関する研究

保健福祉学部 コミュニケーション障害学科
准教授 渡辺 眞澄 (わたなべ ますみ)

連絡先 県立広島大学 三原キャンパス 3507号室
Tel 0848-60-1152 Fax 0848-60-1152
E-mail masumi-w@pu-hiroshima.ac.jp

専門分野： 言語障害学、失語症、認知神経心理学

キーワード： 文発話、文理解、文法、認知、訓練

● 現在の研究について

私たちは、日常、特に意識せずに、自動的といっただけで、良いくらいに努力感もなく、文を発話し理解しています。もし言語が単純で自動的だとすれば、脳損傷で失語症になった人に、スパルタ式に、何度も何度もことばを聞かせ発話して貰えば、失語症は良くなるのでしょうか？

答えは「否」です。自動的＝単純とは限りません。脳の働きのなかで、言語や思考は最も高度に発達した機能であり、脳の最後のフロンティアとも言われます。最近の研究の進歩でいろいろなことが分かってきたとはいえ、言語や言語障害は未知の部分が多く、チャレンジングな研究領域です。

「蛸を食べた」、「蛸が食べた」は一音違うだけですが、意味は大きく違います。この違いは、助詞の「を」が食べられた方を、「が」が食べた方を表す、と文法的に説明することも可能です。では「蛸が食べられた」の「が」はどうでしょう？このように助詞の機能を統一的に解釈するのは簡単ではありません。

失語症の人では、文法に障害が現れることがあります。例えば、「おじいちゃんの生きてる時が使ってたお部屋__あるし・・・」と発話したりします。おそらく「おじいちゃんの生きてた時に使ってたお部屋ががあるし」と言いたかったのでしょうか。このように助詞（が、を、に、など）の誤りや、動詞の活用語尾の誤り（生きてた→生きてる）などの症状は文法障害（失文法）がある人に見られます。失文法例では、受け身文「お父さんが

お母さんに叱られている」は、能動文「お父さんがお母さんを叱っている」より理解が困難です。また「蛸を食べる」、「蛸を食べた」も一音違いで意味が異なります。動詞活用も五段活用（Ⅰ類）と一段活用（Ⅱ類）で難しさが違います。こうしたことがなぜ生じるのかを解明していくことが、有効な治療法開発につながると考えています。

現在、私は文の要となる動詞に関する研究を行っていますが、「窓を開けた」と「窓が開いた」のような関連のある動詞対（非対格 vs. 非能格動詞）を含む文では、後者が理解困難であることを見出し、そのメカニズムを明らかにしました。失文法を含め失語症状の原因を探ることは、訓練効果の高い治療法開発につながると考え、絵と単語の干渉課題を用いた研究、ほかを行っています。

● 今後進めていきたい研究について

上記の研究を発展させ、文法障害や語形成障害の訓練法開発を行いたいと考えています。

● 地域・社会と連携して進めたい内容

長期的なスパンでは、きちんとした教育・研究を行い、世に誇れる言語聴覚士を輩出し、失語症の研究を通して脳の言語機能を解明し、新しい治療法の開発につなげていくことが最も重要な地域・社会貢献と考えています。同時に、地域の失語症や高次脳機能障害の方々を対象に、障害の軽減、生き甲斐の創出に積極的に取り組んでいます。

● これまでの連携実績

言語聴覚士や医師を対象とした全国規模の講習会の講師を、また近隣の言語聴覚士・医師を対象とする公開講座で話題提供を行いました。